

心理臨床における声に着目する意義

山崎 基嗣

1. はじめに

心理療法では、クライアントがセラピストに自らの悩みや感情、体験などを語ることによってそのプロセスが展開していく。また、言語的な表現を媒介にするだけでなく、箱庭や夢、あるいは描画といったイメージなど、言語以外の手段を用いることで治療が展開していくことも少なくない。これは、セラピストとクライアントという二者による関係性の中に、第三のものが持ち込まれることで治療が進んでいくと考えられるからである。こういったやりとりが、セラピストとクライアントの間でなされるとき、その内容はおもに言葉によって伝えられる。もちろん、心理療法においては言語的コミュニケーションのみならず、相槌や身体の動きの同調などといった非言語的コミュニケーションのもつ意味も大きく、その重要性については、Gabbard(2010)や長岡ら(2011)、長岡(2006)をはじめ多くの指摘がなされていることである。しかし、言語的なやりとりを基礎とする心理療法においては、やはり言葉から得られるものは多い。

言葉は、お互いの声に乗せられて相手に届く。この、いわば言葉に乗せる「器」としての声は、言葉そのもののもつ意味以上のことを相手に伝えることを我々は経験的に知っている。たとえば、「ありがとう」という言葉を、やわらかく穏やかな声で発した時と、一語ずつ強くはっきりと発した場合とを想像してみれば容易である。前者は、その言葉を聞くと、まさに相手の感謝の気持ちとして感じるであろうし、後者の場合は、言葉の外面的な意味とは裏腹に、迷惑であることを伝えていると感じられるであろう。上記の簡単な例は、人が言葉を発するとき、その言葉の持つ外面的な意味だけでなく、その奥にある意味をも伝えており、その際に声の果たす役割は大きいことを示している。

心理臨床における声に関しては、「聴く」とこととの関連でクライアントの声に触れているものもある(三好, 2009)。これは、心理療法における主体はクライアントであり、その主体の声の裏側、つまり言葉として伝えられているものとは別の、クライアントの内側にある情緒や思いを理解する上での手がかりになると考えられるからである。しかしながら、たとえば、Sullivan(1956)が「精神医学的面接とはすぐれて音声的(ヴォーカル)なコミュニケーションである」と述べ、中井(1991)も精神療法は「言語治療ではなくて音声治療である」と述べているように、セラピストの声についてもその重要性が指摘されており、セラピストの声について考えることも見落としてはならないだろう。

上述の Sullivan や中井の指摘は、両者が共に「音声」という言葉を用いているように、声に

よる非言語的コミュニケーションを重視していることの表れである。しかしながら、声は単に非言語的な意味をもつだけではなく、川田(1998)が「声を発することは、声を発するという行為を支える状況性と、声を発する者の現前性と、声の向けられた相手の特定性とをまきぞえにして成り立っている」と指摘し、神田橋(2006)も、「音声言語は無意識やからだと陸続きでありながら、文字言語というからだと切り離された世界への橋渡しの機能があるとし、さらにコミュニケーションの機能としては、いま・この相手に限定された確かな手ごたえのあるコミュニケーションである」として、「音声言語が面接場面において用いられるコミュニケーション手段の中でも特別な位置と機能を備えている」と述べていることから、声のもつ非言語的側面のみならず、声の状況性と現前性、特定性も重要である。この意味で、たとえば議論をしている時の声が日常会話における声とは異なるように、心理療法のように、セラピストとクライアントが一对一で何らかの心理学的テーマについてやり取りをするとき、そこには日常会話とは異なった声の様相が立ち現われると考えられるのではなからうか。そして、心理療法における声の様相について考えることは有意義であると思われる。

そこで本稿では、これまで心理臨床において声がどのようなものとして捉えられ、扱われてきたのかについて、これまでの論述を概観するなかで検討する。次にそこから浮かび上がる心理臨床における声について捉えなおし、心理臨床における声について検討する。そのうえで、心理療法におけるセラピストの声について筆者なりの考えを示すことで、心理療法における声に着目することの意義を論ずる。

2. 声の身体性

2-1 発声とからだ

そもそも人間の発する声は、いかにして生まれるのか。まずはその仕組みから見ていくことにしよう。

まず、呼吸によって一度体内に吸い込まれた空気が、肺のはたらきによって再び外へ吐き出されるとき、喉の声帯を通る。このとき呼気によって声帯が振動し、喉頭原音という声の素になる音が発生する。喉頭原音を、喉頭腔、咽頭腔、鼻腔、口腔といった共鳴腔で反響させることで声となる。そして口の形や舌の形を変化させることによって音を調整し、それらを紡ぎ合わせていくことで言葉になっていくのである。Anne(2006)によれば、胴体の四分の三までもがこの声を作り出す作業に加わっており、それは呼吸に関係する器官の多さからもわかる。

また、竹内(1988)は、声は「本来からだの発する音、さらに主体とそのからだそのものに即して言えば、からだの動きに他ならぬことになる」とし、「こえの問題は、本来発声器官の問題ではなく、からだ全体の問題である」と述べている。さらに、「イキ(息)は生きると同根のことばだ。同じように、息と「生き」が同じことばである民族は世界に数多い。ヤマトコトバのイノチの「イ」は、息「チ」は勢いのことだから、息を吐く力、ひいては、話すことばに力が、勢いがなくなるということは、生命の力の衰えを意味するのだ」(竹内, 2007)との記述を踏まえると、発声は人間存在全体の営みであると考えられる。

したがって、声はそれを発する身体と密接に繋がっており、生体の内部から発せられるものであるため「力動的 dynamic」(Ong,1982)なのである。そして、増野(2014)の言葉を用いるなら

ば、「声は人間の身体と一体化した圧倒的な存在」なのである。

もちろん、ことばは書くことによっても伝わるが、書くという行為は、Ong(1982)が「書くことは、精神の外に『ひとすじ line』の連続性を作り出し、テキストの中にとどめる」と述べているように、人の精神と身体とを切り離すこととなるため、書かれたものには、それを記した者の生々しい身体性や情緒などは反映されない。このことが声で話すことばが、文字に書かれたことばと比べて表情ゆたかで精彩にあふれている所以である(川田, 1998)。

このように、声はそれを発する人間の身体に深く根差し、力動的であるため、声にはその人自身のありようが生々しく表れる。

2-2 内側と外側をつなぐものとしての声

声を発することは人間の内側と外側をつなぐことでもある(増野, 2014)。人間は呼吸によって、身体の外側と内側で空気のやりとりをして生きている。これは呼吸によって身体の内側と外側がつながることだと言える。また、前項で見たように、声が呼吸に伴って生まれるという点において、声も身体の外側と内側をつなぐ役割を果たす。これを二者間のコミュニケーションに置き換えて考えると、声は自己と他者とをつなぐ存在となり、声を出すことは自分の存在を他者に伝えることとなる。

では、声が自己と他者とをつなぐとき、それを仲介するものは何なのであろうか。一つは「リズム」である。音楽や歌を聴くとき、われわれの身体は自然とその規則的なリズムに同期して動く。これは「音楽に合わせて踊ったり、手や足でビートやリズムを刻んだり、体を揺らしたりすることで私たちの身体は音楽と一体化する」からであり、「ビートを共有することは、私たちの身体を他人と連動させる一つの根源的な方法」(増野, 2014)であるからである。声に関しても同様に、声のもつリズムと同期することによって、私たちは他者とつながる。この点に関連して、岡本(1982)は、新生児の対人的行動としての共鳴動作について述べる際に、「リズムの共有」について触れ、そこでは生後間もない子どもが相手のリズムに身をゆだねることによって、互いに相手と一体化する「情動の共有」といってもいいような関係が生まれていると述べている。言語を獲得する以前の新生児が母親をはじめとする他者とのやり取りを行うにあたり、言葉以前の音声としての声のリズムを用いて相手とつながりを持つということは、人間のコミュニケーションの本来的な性質を現わしていると考えられる。

声のリズムに加えて、声の持つ「響き」も自己と他者をつなぐうえで重要な役割を果たしている。声は声帯を振動させることによって作り出され、それが空気を震わせ、響きとなって伝わる。その響きは、さらに声を向けられた他者の身体に無条件に入り込み、他者を響かせるという形で、直接的にはたらきかける。同じように、他者の声も響きとなり自己の中に入り込み、直接的に自らにはたらきかける。竹内(1988)の言葉を借りるならば、「呼吸とこえの響き＝共鳴がからだに震動を起し、変化させ」るのである。このように「響き」によっても、声は自己と他者をつなぐ。

声によって自己と他者がつながるということは、すなわち声によって自他の区別があいまいとなり、互いに重なり合う事象が生じるということである。これはここまで述べてきたように、声の持つ音声的側面によって成り立つのである。声は深く身体性に根差した力動的なものであ

り、話し手の情緒を生々しく表すからである。これは、声が発せられたその先から消えていくという「いま、ここ」性を伴うことによって、より鮮明にそのときの自己、あるいは他者を感じさせる。さらに、心理療法においては通常の社会的関係とは異なった関係性が立ち現われるため、そのような特殊な関係性においては、この自己と他者のつながりはより明確に感じられる。

特に、非対面型の寝椅子の設定による自由連想を用いる精神分析においては、クライアントとの関係性が音声的なコミュニケーションに限定される(妙木,2005)ため、声が非常に重要になる。妙木(2005)はさらに、「声はクライアントが話している内容との関連でそのクライアントの情緒的な状態を把握するためのよき媒体者となるのであり、『言葉』と『意味』の一貫性をもたらす手短な手段となり得る」とも述べている。妙木はクライアントの声のみに着目しているが、ここで述べられていることと同様のことがセラピストの声についても言える。つまり、二人の人間が声によることばのやりとりによって出会う心理療法において、声は自分や相手の内面を表わす重要な指標となりうるのである。これは、声の持つ身体性ゆえであると考えられる。

「リズム」と「響き」という声の音声的側面によって自己と他者はつながる。心理療法においては、そのような側面をもった声によって「語る」ということが重要な意味をもつ。

なお、「語る」という語と似た言葉として「話す」という語がある。本稿では、「語る」とは限定的な目の前の相手に対して、語り手の内的な事柄を語ること(悩みや情緒などを表出すること)を意味する語として用いるのに対して、「話す」とは一般的な事柄について不特定の相手に話すこと(情報の伝達や友人との会話など)を含意する語であるとして、「語る」と区別して用いることとする。

2-3 「語る」こと、「聴く」ことと声

「語る」という行為は、「誰か」に語ることであり、常に自分以外の他者に対して声を発する行為であると言える。竹内(2007)は語ることと声について「話しかける[語る]声は、単なる音波ではなく、相手と自分一話しかける[語る]という行為にもっと即して言えば、『あなた』と『わたし』の間に起こる人間関係の関わりのあらわれなのだ、ということになる。単にかかわろう働きかけようという主観の意志ではなく、存在と存在との間に起こる具体的なふれあいが声なのだ」と述べ、声によって相手とつながり、そこでは意識的なものを超えた相互的で具体的なやりとりが生じていると述べている。また、『話す』[語る]とは、声によって人に働きかけ、相手の行動＝存在の仕方を変えることだ。(中略)ことばとは、まず自分の中で生まれるけれども、相手のからだ＝存在の地点に至って、はじめて成り立つもの」と述べていることから、「語る」ためには相手の存在が不可欠であり、声は相手にはたらきかけ、相手を変える、動かす力をもつものであると言える。「語る」ことは声の音声的側面によって相手とつながるだけでなく、目の前の「あなた」という相手に語るという現前性、状況性、特定性による相互的かつ具体的な営みなのである。

一方で、川田(1998)が、「声は私の体内から出るものでありながら、口から発せられたあとでは他人と共有されてしまう」ものであり、「声を発することがもつ暴力性、凌辱性と、声を人前にさらすことへの羞恥という両義性も、それらのことと無関係ではあるまい」と述べているよ

うに、「語る」ということは、自らが意図しないところで、自分自身の内面を相手に晒してしまう危険性も同時に含んでいる。この川田の論はアフリカのモシ社会における声の用いられ方を分析し、声の持つ根底的な性質について考察している。

しかし、川田の指摘する声の性質は社会を対象にした研究から導出されたという点において抽象的であり具体性を欠いている。それに対して、心理療法においてはセラピストとクライアントの二者による特殊な関係性が成立するものであり、そこでやり取りされる声はより個別的で具体的なものである。加えて、このような性質を持つ声で「語る」ことによって成立する心理療法においては、セラピストとクライアントの間でより深いテーマが語られる。したがって、川田の指摘する声の暴力性や凌辱性、あるいは両義性という問題をよりリアリティを持って捉え、「語る」ことによって凶らずも自分の内面が出てしまうことに対するの視点を持つことは心理臨床において重要であるといえる。

ここまでの記述の前提には、「語る」ことは常に「聴く」とことと表裏一体の関係にあるということがある。そこで、ここまでの記述を今度は「聴く」という面から捉えなおしてみよう。

声を聴くことはつまり、相手を聴くこと、相手を受け取るということと言える。先の川田(1998)の指摘の通り、声にはその声を発した人自身が生々しく表れているため、その声を「聴く」ということは、その生々しい部分にふれるということになる。このふれるということに関して、鷺田(1999)は「声の肌理」に着目しながら述べている。まず、鷺田(1999)は「触る」とことと「ふれる」ことを明確に区別している。「触る」ことが主体と客体とのある隔たりをおいた関係を前提としているのに対して、「ふれる」というのはふれるものとふれられるものとの相互浸透や交錯という契機をかならず含んでいるとし、他者の声を聴くことの根底は「自－他、内－外、能動－受動、という区別を超えたいわば相互浸透的な場」に「ふれる」ことだとしている。そのうえで、声の肌理とは声の持つ「強度と律動と艶と陰影」であり、「その肌理が意味とは別の形で他者にふれる」、「声とはそのままその声を発した他者と繋がることである」と述べ、声の肌理に「ふれる」とは身体に「ふれる」ことであると述べている。

文字通り実際直接的にクライアントの身体に触れることのない心理療法において、声に「ふれる」ことがクライアント自身に「ふれる」ことであるという視点は大切な視点であると言えるだろう。

ただし、先ほどの川田(1998)の指摘にもあったように、声には意図せず自らの深い部分が現われ出てしまうことになるため、三好(2009)の指摘するように、声にふれることは「ともすれば強烈な侵襲としてはたらくおそれもはらんでいる」。したがって、『ふれる』という経験に本質的なものとされる事態と、そうした場に立ち至る可能性についての鋭敏で細やかな感受」が不可欠である。そしてこのことによって、「同時に存在しながら、『ふれる』という経験をかたちづくって」いくことが重要なのである。

つまり、「聴く」ことは、相手を受け入れることである一方で、「聴いてしまう」という相手に侵襲的に作用する恐れのある行為であり、このような声を聴くことの破壊的な側面についての視点も見落としてはならないだろう。

ここまで見てきた声の身体性や、声に発し手のその人らしさが現われているということに関して、演劇や歌における「声」の捉え方が、心理臨床における声を考える上で示唆を与えてく

れる。演劇では、声はパーソナリティを演じるための表現の一部として、意識的に用いられる。演劇では、特定の役割を演じるための声の様式化され、声色や歌い方などが、特定の性質や身分と結びつくものと考えられる場合も多い。声は仮面や化粧と同じように、素顔を隠し、自分とは違った別の時代、別の身分、別の性格をもつ役柄を演じるための道具の一つ（増野, 2014）として用いられている。そもそも「パーソナリティ personality」の語源は、Allport(1937)によるとラテン語の「ペルソナ per sona」に求められる。これは「音を大きく通す、音が鳴り響く」という意味であり、そこにはこれまで述べてきた声の響きの持つ側面が現われている。それが転じて「仮面」という意味をもつようになったのである。このように、ペルソナの語源において、音が響くという音声的な面がその人の個人的な部分を表わすという意味に転じていったということは、「声」がその人らしさを表わすということを考える上で重要な示唆を与えてくれる。ちなみに、「仮面」という面を強調して Jung(1933)はペルソナの重要性を提起している。

ただし、演劇における「声」が心理療法における「声」と異なる点は、演劇においては声の意識的に操作可能な面に着目している点である。しかしながら、これまでに見てきたように、声には自らが意識的にコントロールできる部分のみならず、意図せず出てしまうという部分も同時に含まれている。心理臨床においては、声の持つ二面性に着目し、声の意識的な部分のみならず、無意識的に出てしまう声にこそ目を向けていくことが大切な視点となる。

3. 声の作り出す「非日常性」

3-1 「非日常性」と声

ここまででは、声の身体性や、声のもつ音声的側面によって自己と他者がつながること、そして、そのような性質をもった声によって語ることの意味とそれがはらむ危険性について見てきた。これらは声というものが持つ一般的な特質であると言えよう。しかしながら、こと心理療法という文脈に着目すれば、心理療法がクライアントの抱える悩みや苦しみについて、セラピストとともに向き合っていくという「非日常」のものである以上、そこでやり取りされる声は「非日常性」との関わりがあるのではないかと考えられる。したがって、ここからは、「非日常性」との関連から声について考えていきたい。そこで声と「非日常性」との関係について、演劇と宗教儀礼における声の用いられ方を参照しながら、声が「非日常性」を帯びる条件について考えてみたい。

演劇については、平田(1998)が「演劇は、ある表現の構造を通じて、このような、日常生活では見落としてしまう、または見て見ないふりをしてしまう人間の微細な精神の振幅をも顕在化させる」と述べている。このように、演劇という枠組みが与えられることによって、そこに日常とは異なる空間が生じ、そのような「非日常」な空間で演じることによって、人間の奥にある深いテーマが立ち現われてくる。演劇と心理療法の関連性については、河合(2013)が指摘しているように、このような「非日常性」が用意されることによって、「守り」が生まれ、クライアントは内的表現を自由に行うことができるようになるのである。

同じく河合(1986)は、心理療法と多くの宗教的儀礼との類似について触れるなかで、心理療法の「非日常性」について述べている。声と宗教儀礼との関係については、増野(2014)によると、声は古来多くの文化において、魔術的な世界観と結びつき、声に出されたことばには現実

の世界に作用する潜在的な力があると考えられていた。この「世界に作用する潜在的な力」のことを、Tambiah(1968)は「ことばの魔術的な力」と呼んだ。たとえば、川田(1998)はアフリカのモシ社会の儀礼的な場における声の用いられ方を引き合いに出しながら、超越的存在との交わりに用いられる声が日常的な発話とは異なることを指摘しているし、増野(2014)はイスラム教や仏教をはじめ世界の多くの宗教において声が日常会話とは異なった用いられ方をさると述べている。

宗教儀礼における声が「非日常性」を作り出すうえで重要な点は、まず、宗教儀礼においては厳しい枠組みと取り決めが決まっているということである。この点に関して増野(2014)は声が魔術的な力を持つためには、決まった準備が必要であると述べている。

そして、呪文や祈祷の文句の中には意味が理解できないことばがしばしば登場する。増野(2014)によると、ヒンドゥー教や仏教の儀礼ではしばしばサンスクリット語が使用され、キリスト教の典礼では古典ギリシャ語やラテン語が重視され、イスラム教の儀礼ではアラビア語が使われる。これらの儀礼言語の多くは宗教に関する文脈のみで使用され、聖地の言葉であったり、神々の時代の言語であるがゆえに正統的で真正な言語と考えられ、世俗的な言語とは区別される。人は自分の日常の外側からやってくる「見知らぬもの」「自らと異なるもの」に、畏怖と魔力を感じるものであり、そうした畏怖をパワーとして、声やことばのなかに取り込もうとするのが呪文や祈祷句であると考えられる。

以上のように、演劇と宗教儀礼の比較を通して、声が「非日常性」を帯びる二つの条件が浮かび上がってくる。第一に、場と枠組みが決められているということである。第二に、演劇では日常とは異なる発声をし、宗教儀礼においては古代の言葉が用いられるように、発せられる言葉が日常とは異なることである。そして、そのような条件のもとに発せられた声は、発し手の身体に深く根差したものであり、そのリズムと響きによって直接的に他者、ひいては世界にはたらきかけるという性質を帯びるのである。もちろん、この「非日常性」を生み出す要素には、声の響きとリズムのみならず、声の「テンポ」や「間」、「抑揚」なども含まれる。これは世界の様々な文化における儀式において、日常会話とは異なる独特な抑揚やリズムをもった声を用いられていることから推察できる(増野,2014)。

3-2 心理療法における「非日常性」

それでは、心理療法における声についてはどうであろうか。演劇と宗教儀礼における声が「非日常性」を作り出すための第一の条件は、場や枠組みを整えることであった。この点、心理療法も特定の場所と時間という決められた「枠」のなかで行われ、先に述べた宗教儀礼における厳しい枠組みと取り決めと同様である。

心理療法における枠とは、河合(2013)も述べているように、時間、場所、料金がその主なものである。たいていは、週に1回50分という時間と、いつもと同じ場所が決められ区切られることによって、心理療法は日常とは異なる時空間として成立してくるのである。

次に、演劇と宗教儀礼における声が「非日常性」を作り出すための第二の条件は、そこで発せられる言葉が日常の言葉とは異なるものであるということであった。心理療法においては、クライアントがその主体となり、自ら語ることによってそのプロセスが進んでいく。心理療法

における語りが日常会話と異なる点は、長岡・小森(2009)が示すように、頻繁な話者交代がないという点である。心理療法における語りは、その場で紡ぎ出されていくという点において、予め用意されたテキストに基づいて行われる演劇や宗教儀礼とは異なる。また、演劇や宗教において語られることは人間一般についての抽象的なものであるのに対し、心理療法における語りは個別的で具体的である点が異なる。しかしながら、いずれにせよそこで語られる言葉が日常とは異なるという点において両者は共通すると言える。心理療法におけるクライアントの語りは、セラピストとクライアントという二者が存在するものの、モノローグ的なものとなる。その語りのなかで、セラピストはクライアントの言葉を繰り返すこともあれば、クライアントの語りを受けての言葉を伝えることもある。

このとき、セラピストとクライアントの境界が曖昧となる心理療法においては、発せられた声もセラピストのものなのか、あるいはクライアントのものなのかがあいまいとなる。つまり、クライアントは普段自分の内側で聞いていた声が、あたかも自分の外側から聞こえるかのような体験をすることになる。この意味で、クライアントにとってセラピストの声は、自分の日常の外側からやってくる「見知らぬもの」「自らと異なるもの」でありつつ自らの内面から出てくるものとなるのである。クライアントは「自らとは異なるもの」としてのセラピストの言葉を取り入れ、取り入れられた声は、第2節で見てきたように、身体性を伴うことによって、クライアントにはらたきかけその変容を促す。このときの声は日常の声とは異なる「非日常性」を帯び、心理療法の場に「非日常」を作り出す。

では、心理療法の「非日常性」が声にどのような力を与え、クライアントに影響するのだろうか。心理療法が決められた枠のなかで行われ、また、セラピストの声がクライアントの変容にはたらきかけるとい点において、セラピストの声は「魔術的な力」を持つと考えられる。ここでいう「魔術的な力」とは妙木(2005)が「治療者は声という媒介によって、その内省のプロセスに関与して、その対話を思索へと変化させ、さらに循環的、回帰的にクライアント自身の内的世界を裏り多きものにしようとしているのである」と述べているように、クライアントの語りを支え、内省を促進させる力である。

古くから声の魔術的な力を使いこなせるものが専門家としてみなされてきた(増野,2014)ことに鑑みると、面接でこのような声を用いるセラピストの声は日常会話における声と異なるだけでなく、クライアントの声とも異なると言える。このような声に関して、松木(2010)はそれが面接でのクライアントとのコミュニケーションにおいて重要であることを指摘しているし、鈴木(2006)からは解釈の際に声の質を重視していることが窺える。

心理療法の「非日常性」がクライアントの「守り」として機能するように、「非日常性」を帯びる声もまた、クライアントの守りとして働くと考えられ、これが心理療法において立ち現われる声の様相であると考えられる。

4. クライアントを抱える器としてのセラピストの声

ここまでは、声の性質と、それによって心理療法という場が「非日常性」を帯びることを論じてきた。前節の最後に指摘したように、心理療法におけるセラピストの声にはクライアントの声とは異なる側面があり、「非日常性」を帯びることによってクライアントの「守り」として

機能する。では、どうして「守り」として機能するのだろうか。ここからは、この点に関して「情動調律 affect attunement」(Stern, 1986)と「抱えること holding」(Winnicott, 1960)を軸にもう少し考えていくことにする。

Stern(1986)は、生後9～15か月の幼児と母親との間には情動調律と呼ばれる間主観的な現象が生じると述べている。Stern(1986)は情動調律を、「内的状態の行動による表現形をそのまま模倣することなしに、共有された情動状態がどんな性質のものか表現する行動」と定義し、情動調律が成立するためには、「異なった形式や知覚様式で起こるいろいろな行動表現が、何らかの形で相互に交換可能」でなくてはならないと指摘している。そうすることで、乳児は主観的自己感を形成していく。第2節でふれた岡本の「情動の共有」においては、こどもが相手のリズムに身をゆだねることによって、こどもは相手と一体化するとされていたが、Sternのいう情動調律は、子どもが母親に同調しているのではなく、母親の方が子どもの動きの大きさに合わせて声を調整している。「情動の共有」にしろ、情動調律にしろ、母親と乳児の「相互的なやりとりが生じているということが重要であり、相互的なやりとりによって両者は一体となる。これは心理療法に置き換えて考えると、セラピストがクライアントの語りや動きに合わせて声を調整していることと同義であると言える。セラピストによる声の情動調律によって、セラピストとクライアントは一体となる。この一体となることが「抱えること」が成り立つ上で大切になってくる。

Winnicott(1960)によると、「抱えること」とは、乳幼児を実際に身体的に「抱っこ」することだけでなく、ともに生きるという概念が出来上がる前の、環境による提供すべてを意味する。これは神田橋(1990)のいう「抱え」と同じと考えられるが、この「抱え」は主体の活動を助ける重要なものである。そして「抱えること」はただ単に身体的なことではなく、精神的なことでもあり、抱えることを通して、母親と赤ん坊の間に、非言語的なレベルで、相互的なコミュニケーションが成立する(館, 2013)。Winnicottは早期母子関係にみられる現象と同じような現象が、精神分析的な治療場面においても見られるため、早期発達の理解が必要不可欠であると述べている。精神的に抱えることに関しては、Anne(2006)が母親と乳児のやり取りについての文脈において「母親語はいわば母の腕の延長であって、『言葉であやす』役目を果たし、母が近くにいることを知らせて赤ん坊を安心させる手段なのではないか」と述べていることから、母親の声に乳児を抱える機能があると考えられる。この意味で、クライアントが語り、セラピストがその語りを聞くという相互的なやり取りにおいて、セラピストの声はクライアントを抱える器となりうるのではないだろうか。

これまでもセラピストがクライアントを抱える器として機能することの重要性については議論され共有されてきたことである。しかしながら、上述の Anne(2006)の指摘にもあるように、セラピストの声はクライアントを抱える環境を成立させる上での一つの要素として考えられ、声を抱える環境を成立させる上でいかに機能するのかを検討することは意義があると考えられる。この点に関しては、李(1997)の自閉症の女兒 K とのセラピーをもとに考えてみたい。事例の概要は以下の通りである。

生後一〇カ月ごろ「ウン」「マンマ」などの言葉があったが、徐々になくなる。初回、K はチ

チェーンを片手に持ち、視線を合わさず、テーブルの上を飛び渡る。本棚の本を指でさわりながら「ムビュムビュムビュ」と喃語のように発声する K の斜め後ろに立ち、Th.は K の声をくエコーする。これをしばらく続けると、K は握りしめていたチェーンを手放し、靴のつま先で Th.の足にそっと触れてくる。その後、K はソファーに仰向けに寝ころがる。Th.がリズムカルに K の身体を屈伸運動させると、K は赤ん坊のような笑顔を見せる。そして、座っている Th.の背中にこわごわおぶさってくる。

李は言葉・声の模倣をくエコー、身振り・行為の模倣をく鏡映と呼び、両者を分けている。この事例において着目すべき点は、Th.が K の発声に対してくエコーした点だろう。これは情動調律の一つであると考えられるが、これによって、Th.は K と繋がることになった。これは、その後 K が握りしめていたチェーンを手放し、Th.にそっと触れたという経過からも示される。また、その後もリズムカルな屈伸運動によって調律は進み両者は一体となる。そして K は Th.の背中におぶさってくる。この事例について、李(1997)は「K がチェーンを手放したことは、Th.によって保護されていると K が感じたことを示している」と考察しているが、「抱えること」が安心感につながるものであることを考えると、このケースにおいて、Th.の声のくエコーが K を抱える役割の一部を果たしていたと言えるのではないだろうか。Th.が K の声に「ふれた」ことによって、Th.と K はつながり、K は「抱えられた」感覚をもったため、K は安心感を得たとも言えるのではないだろうか。そして、K が直接 Th.の身体に「ふれる」ことにつながっていった。

さらに、声の抱える機能については、竹内(2007)の提唱する「話しかけのレッスン」も臨床的な示唆を与えてくれる。「話しかけのレッスン」とは、部屋の一方に話しかけ手が立ち、残りの空間に五人ばかりの聞き手が各々好きな位置に好きな方向を向いて座り、話しかけ手が、聞き手の中のどれか一人に短いことばで呼びかけるというものだ。聞き手は、ひとりひとり別の方向に向いたまま話しかける声を聴く。その際ことばの内容には一切かわからず、ただ自分に話しかけているかどうかだけに注意を集中する。このときの聞き手の反応にはさまざまあるが、そのなかで、「声 came、と思うとふうっとからだ全体を包んだ、ほっと安心した、ということがあった」と報告しているケースがある。これは環境としての話しかけ手によって提供される精神的な抱えによって聞き手に安心感が生じていると考えられ、まさに Winnicott のいう「抱えること」が生じていたことを示すものであろう。

このように、情動調律によりセラピストと一体となったクライアントの語りをセラピストの声が抱える。もちろん Kohut(1995)のいうように、治療者の語調、身体の動きなどの非言語的コミュニケーションの手段を通して患者の状態についての正確な共感的理解が伝わる場合には、患者にとって治療的効果があるので、声のみによって情動調律や抱える環境が成立するわけでは決していないが、セラピストがクライアントとの間で情動調律を行い、抱える環境を成立させる要素の一つとしては重要な役割があると考えられる。

5. おわりに

以上本稿では、はじめに声の身体性に着目し、声にはその発し手の内面が生々しく表れるこ

とをこれまでの論述を見ることで確認した。そのうえで、心理療法において「語る」ことが意図せず自らの内面をさらけ出してしまう危険も内包しており、そういった点に関する視点を持つことの重要性とその際に留意すべき点について述べた。また、クライアントの声のみならず、セラピストの声にも心理療法においては日常とは異なる面が立ち現われることをこれまでの論述をもとに指摘し、その声は「非日常性」を帯びることでクライアントの変容を促す力をもつと考えられた。さらに、心理療法におけるセラピストの声にはクライアントの語りを支え、抱える役割があることを事例を通して指摘した。そして、この意味で、心理療法におけるセラピストの声は重要な役割を果たすことを指摘した。

ただし、第3節において心理療法における「非日常性」を成立させるうえでの要素の一つとして声の役割を述べたが、あくまでもアナログカルで試論的な議論に留まるものであり、具体性に欠けているため、今後はより臨床素材も踏まえつつ具体的な議論を深めていく必要がある。

また、音声については、音声データをもとに客観的にとらえていく試みも必要になると考えられる。

引用文献

- Allport, G. W. (1937). *Personality: A Psychological Interpretations*. Henry Holt and Company. 詫摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀正(訳) (1982). パーソナリティ 心理学的解釈. 新曜社. pp. 21-47.
- Anne Karpf (2006). *The Human Voice: The Story of a Remarkable Talent*. Bloomsbury Publishing PLC. 梶山あゆみ(訳) (2008). 「声」の秘密. 草思社. pp. 30.
- Gabbard, G. O. (2010). *Long-term Psychodynamic Psychotherapy: A Basic Text, Second Edition*. American Psychiatric Publishing, Inc. 狩野力八郎(監訳)・池田暁史(訳) (2012). 精神力動的的精神療法—基本テキスト. 岩崎学術出版社.
- 平田オリザ (1998). 演劇入門. 講談社. pp. 43.
- Jung, C. G. (1933). *Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten*. Zürich. 野田倬(訳). (1982). 人文書院. pp. 57-67.
- 河合隼雄 (1986). 心理療法論考. 新曜社. pp. 96-111.
- 河合隼雄 (2013). 河合隼雄のカウンセリング講話. 創元社. pp. 56-98.
- 河合俊雄 (2013). ユング派心理療法. ミネルヴァ書房. pp. 7.
- 川田順造 (1998). 聲. 筑摩書房. pp. 11, 12, 15-16, 27.
- 神田橋條治 (1990). 精神療法面接のコツ. 岩崎学術出版社. pp. 27-42.
- 神田橋條治 (2006). 「現場からの治療論」という物語. 岩崎学術出版社. pp. 24-25.
- Kohut, H. (1984). *How does analysis cure?* University of Chicago Press. 本城秀次・笠原嘉(監訳). (1995). 自己の治癒. みすず書房.
- 松木邦裕 (2010). 精神分析臨床家の流儀. 金剛出版. pp.41-42.
- 増野亜子 (2014). 声の世界を旅する. 音楽之友社. pp. 12, 63-64, 101-112, 196.
- 妙木浩之 (2005). 精神分析における言葉の活用. 金剛出版. pp.63-78.
- 三好智子 (2009). 「聴く」という営みにおける身体一声に「ふれる」という経験に着目して. 伊

- 藤良子・大山泰宏・角野善宏(編). 京大心理臨床シリーズ 心理臨床関係における身体. 創元社. pp. 209-217.
- 長岡千賀 (2006). 対人コミュニケーションにおける非言語行動の 2 者相互影響に関する研究. 対人社会心理学研究, **6**, 101-112.
- 長岡千賀・小森政嗣 (2009). 心理面接におけるカウンセラーの応答: 話者交替時のカウンセラーの発話冒頭を指標とした事例研究. 認知科学, **16**, 24-38.
- 長岡千賀・小森政嗣・桑原知子・吉川左紀子・大山泰宏・渡部幹・畑中千紘 (2011). 心理臨床初回面接の進行—非言語行動と発話の臨床的意味の分析を通じた予備的研究—. 社会言語科学, **14**, 188-197.
- 中井久夫 (1991). 中井久夫著作集 5 卷 病者と社会. 岩崎学術出版社. pp. 186-188.
- 岡本夏木 (1982). 子どもとことば. 岩波書店. pp. 51.
- Ong, W. J. (1982). *Orality and literacy : the technologizing of the word*. Methuen. 桜井直文・林正寛・糟谷啓介(訳) (1991). 声の文化と文字の文化. 藤原書店. pp. 74.
- 李敏子 (1997). 心理療法における言葉と身体. ミネルヴァ書房. pp. 88-90.
- Stern, D. N. (1985). *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*. Basic Books, New York. 小此木啓吾・丸野俊彦(訳). (1989). 乳幼児の対人世界 理論編. 岩崎学術出版社. pp. 162-187.
- Sullivan, H. S. (1956). *The psychiatric interview*. Norton, New York. 中井久夫(訳). (1986). 精神医学的面接. みすず書房. pp. 21-22.
- 鈴木智美 (2006). 無意識の迫害的罪悪感: その治療的取り扱い. 精神分析研究, **50**, 37-45.
- 館直彦 (2013). ウィニコットを学ぶ—対話することと創造すること—. 岩崎学術出版社. pp. 92-108.
- 竹内敏晴 (1988). ことばが劈かれるとき. 筑摩書房. pp. 195, 232.
- 竹内敏晴 (2007). 声が生まれる—聞く力・話す力. 中央公論社. pp. 26, 32, 139-155.
- Tambiah, S. J. (1968). The Magical Power of Words. *Man*, New Series, **3-2**, 175-208.
- 鷺田清一 (1999). 「聴く」ことの手—臨床哲学試論. 阪急コミュニケーションズ. pp. 171-195.
- Winnicott, D. W. (1960). The Theory of the Parent-Infant Relationship. *International Journal of Psycho-Analysis*, **41**, 585-595.

(心理臨床学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿 2017 年 8 月 31 日, 改稿 2017 年 11 月 20 日, 受理 2017 年 12 月 20 日)

心理臨床における声に着目する意義

山崎 基嗣

本稿では、はじめに声の身体性に着目し、声にはその発し手の内面が生々しく表れることをこれまでの先行研究の概観を通して確認した。そのうえで、心理療法において「語る」ことや「聴く」ことが意図せず自らの内面をさらけ出してしまうことや聴いてしまう危険も内包しており、そういった点に関する視点を持つことの重要性と留意すべき点について述べた。また、クライアントの声のみならず、セラピストの声にも心理療法においては日常とは異なる面が立ち現われることをこれまでの論述をもとに指摘した。その声は「非日常性」を作りだし、クライアントの変容を促すと考えられた。さらに、心理療法におけるセラピストの声にはクライアントの語りを支え、抱える役割があるのではないかということが、事例を通して考えられた。そして、この意味で、心理療法におけるセラピストの声は重要な役割を果たすことを指摘した。

The Significance of Focusing Attention on Voice in Psychotherapy

YAMASAKI Motoshi

Based on a review of previous studies, this study confirmed that the voice indicates the inner world of the speaker. In addition, “talking” and “hearing” in psychotherapy were shown to involve the risk of revealing the client’s inner world against the client’s will. It is important for the therapist to pay attention to this risk. Both the client’s voice and that of the therapist have particular kinds of aspects. Such a voice in psychotherapy makes a space of extraordinariness and promotes client’s transfiguration. Moreover, by discussing case examples, the therapist’s voice was shown to support client’s talking and to hold the client psychologically. Therefore, the therapist’s voice plays an important role in psychotherapy.

キーワード：声、身体性、現前性、非日常性、抱えること

Keywords: Voice, Physicality, Here and now, Extraordinariness, Holding